

かぶりて入、奥に外祠あり、扉を開ケバ小き銅像あり、取出して巖窟の外へ持出て見れば馬頭觀音なり、又元の如く祀中に納て巖窟を出、此巖窟昔時長瀧寺の道雅法印といふ人、此巖窟に入て護摩を焼しかば、阿彌陀佛の像瀧にうつり給ひし故、阿彌陀が瀧と名くとなん言傳ふ、瀧の裏へも行ば行るべきれども、水煙雨のごとくなる故に予は不行、

〔千曲之真砂二〕小野瀧

是は上松より須原へゆく間にある瀧なり、當國にならびなき大瀧なり、万仞の高嶺よりたゞちに落て、水煙四方に霧をふらし嵐も吹かず、その響いとすさまじ、銀河の九天より落るともいはんか、されど名所歌枕に入らず、昔細川玄旨法印幽齋翁この所を吟行し給ひしも、木曾路の小野の瀧といへるは、布引箕尾ほどにもおさく、おとりやはする、これほどのもの、此國の歌枕には、いかにしてか洩しぬるやと云給へり、また丙寅のとし鳥丸左大臣光榮卿の紀行にも、小野のたきといふ有、そばだちたる巖のこと、高きより、ものにもさはらで一すじにぞ落ける、

妻木こる小野の名高き瀧なれや山かすかなる中に音してと詠じ給へり、是より名所のやうに成ぬ、その後は堂上の歌も多くありとなむ、歌枕として風景のおもしろき事、いづくに有べうもなし、

〔信濃奇勝錄一〕小野瀧

今道に有

細川幽齋の記に、木曾の小野の瀧といへるは、布引箕尾などにもをさ／＼おとりやはする、これ程のもの、此國の歌枕にはいかにしてもらしぬるやと有は、古道にあらざればなり、

今道は天文年中、義在福島へ館をうつされしときに開けし道なれば、其以前は人もあらざるなり、

〔木曾路名所圖會三〕小野瀧 小野村の右の路傍にあり、高三丈許、直下木曾川に落る、